

日本語の動詞における音便の問題

久保 さやか

1. 問題設定

日本語の子音語幹動詞（いわゆる五段活用動詞）が過去を表す接尾辞¹と結びつくときに「音便」²という現象が生じることはよく知られている。音便は、その名が示すように、発音上、便宜的なものと簡単に片づけられがちであるが、当然ながら、一つの音韻変化として、その発生や過程について様々な解釈が試みられてきた。しかし長年の研究によって一応の決着がついていると思われる音便解釈にも、調べてみると、生成音韻論的な解釈と日本語学・国語学の歴史的な研究とでは大きな違いがあることが分かった。両者は、出発点である接尾辞の基底形の設定から決定的に意見を異にしているのである。ここではそれぞれの解釈法の問題点を指摘し、それらを考慮した上で新たな解釈を試みる。

2. 生成音韻論からの一般的な解釈

生成音韻論を手段とした解釈では、調べた限りにおいては、現代の日本語の過去を表す接尾辞として/-ta/が基底形に想定されている。

¹ ないしは助詞「て」。日本語学では連用形に「て」が結びついた形の方を取り上げることが多い。

² 音便は五段活用の他、歴史的に形容詞の連体形、連用形、個々の名詞などにも現れるが、ここでは動詞の場合のもののみを扱う。

2.1. 基底形の設定

柴谷 / 影山 / 田守 (1981) では、まず、母音語幹動詞と子音語幹動詞の「現在形」³と過去形をランダムにいくつか挙げ、比較し、過去形の接尾辞には [ita] と [ta] の交替があることを確認する。そして、そのどちらの語形が基底形になるかが問題になる。[ita] が基底形であれば [i] の脱落、[ta] が基底形であれば [i] の挿入が生じていると考えられる。ここでは背理法的に次の二つの根拠が提示され、最終的に [ta] 形の方が選択されている⁴。

もし [i] の脱落とするなら、まず第一に脱落の起こる環境 (先行音が [s] [k] [g] 以外) が雑多であることが問題視される。そして第二に、丁寧体の場合では、母音語幹動詞と子音語幹動詞とで [masu]⁵ ~ [imasu] の交替が見られることから、次のような規則が得られる：

母音脱落規則： V \emptyset / V + ___

	/#tabe + imasu#/	/#tor + imasu#/
	(「食べる」)	(「取る」)
母音脱落	tabemasu	(n.a.)
	tabemasu	torimasu

ところが過去形の接尾辞 [ita] が付加される際、子音語幹動詞の場合でも母音同士の接合がないにもかかわらず [i] の脱落が生じることになり、矛盾する。従って [i] の挿入の方を採用すべきだという結論に至っている。

³ 国語文法では「終止形」。

⁴ Tsujimura (1996) も、母音語幹動詞と子音語幹動詞の現在形や否定形、過去形などを比較することで [ta] を基底形にしている。ただしその際 [ita/ida] の現れる例を扱っていないので、基底形が [ta] であるか [ita] であるかは問題にされていない。

⁵ [u] は厳密には [ɯ] であるが、以後便宜上、特に問題がない限り、音素的な記号を用いる。[tʃi] や [ʃi]、[tsɯ] などと同様である。

$$\text{挿入規則： } \emptyset \quad i / \begin{pmatrix} s \\ k \\ g \end{pmatrix} + \text{ ______ } t$$

以上のような理由から [ta] 基底形、すなわち [i] の挿入規則の方が選ばれているが、その際いくつかの問題点が指摘されうる。

生成音韻論の方法にのっとして、環境（先行音が [s] [k] [g] 以外）が複雑であることから [i] の脱落は候補から排除されているのだが、ここで逆に、[s] [k] [g] 先行の場合のみ [i] の脱落が起こらなかった、と考えるはならないのだろうか。つまり、[i] の脱落規則の方を採用して、[s] [k] [g] 先行の場合は [i] は脱落しない、という制約を当ててもいいはずである。

同化のような音韻変化はもちろん音環境の影響を受けるため、従来のような規則付けの方が適していると思われる。しかしその一方、脱落や挿入などは音環境によらず音節構造の変化に伴うものもあるため、そういった場合には、基本的には該当する範疇全体に変化が及び、さらには特定の音環境によってはその適用が妨げられると考える方が妥当であろう。ある音韻変化に対して規則を設けるときは、その変化の性質、中でも適用範囲が特定の環境に限定されるか、それとも基本的には全体に及ぶかどうかを考慮に入れなくてはならないと思われる。

また、[s] [k] [g] は整理しやすい方の環境の音グループと見なされているが、この 3 音を括れるような素性はないので、そもそもこの [i] の挿入規則は不自然である。

2.2. 派生過程

上記のように決定された接尾辞の基底形 /+ta/ からそれぞれの語幹子音を持つ動詞について、過去形を派生させると <表 1> のようになる。過程途中の各規則は、いくつかの生成音韻論的方法による部分的な解釈を組み合わせ、まとめたものである。

まず、b-語幹動詞の [b] が、接尾辞の破裂音 [t] の後続ために閉鎖後の解放が失われ、閉鎖状態のみを保った鼻音 [m] に変わる（鼻音

語幹 基底表示	<s> sas + ta 「指す」	<k> kak + ta 「書く」	<g> kog + ta 「漕ぐ」	 tob + ta 「飛ぶ」	<m> yom + ta 「読む」	<n> sin + ta 「死ぬ」	<t> mat + ta 「待つ」	<r> tor + ta 「取る」	<w> omow + ta 「思う」
	鼻音化: b → m / ___ + ta								
	tomta								
	同化: m → n / ___ + ta								
	tonta yonta								
	有声音化: t → d / (子音 有聲 一流音) ___ + a								
	kogda tonda yonda sinda								
	挿入: ø → i / (s k g) ___ + ta								
	sasita kakita kogida								
	脱落: (k g) → ø / ___ i + ta								
	kaita koida								
音声表示	sasita	kaita	koida	tonda	yonda	sinda	matta	totta	?

同化: r → t / ___ + ta

<表1: + -ta を基底形としたときの音便の派生過程>

化)。さらにこの鼻音化で生じた [m] と m-語幹動詞の [m] は [t] に調音点が同化し、[n] となる⁶。次に [+有聲] である語幹 [g] と [n] が後続の接尾辞の [t] に影響を及ぼし有聲音化させる。そして s-、k-、g-子音語幹動詞において語幹と接尾辞の間に [i] が挿入され⁷、そのうちの k-語幹、g-子音語幹動詞においてのみ、代わってその語幹子音が落ちる⁸。その一方、[r] は接尾辞の [t] に同化し二重子音を生じさせる。

どの研究も w-語幹子音動詞の音便については説明が難しいせいも、言及を避けている。先にも述べた通り、[i] の挿入の環境、[s] [k] [g] 先行は一つの音グループとは見なしがたい上に、そのうちの軟口蓋音 [k] [g] のみが脱落してしまうのは不可解である。恐らく s-と軟口蓋音語幹動詞は別々に扱う必要があるだろう。

3. 歴史言語学的研究による一般的な解釈

「過去」を表す接尾辞は古語にさかのぼると、現在と形態が異なるので⁹連用形 + 「て (te)」の形を扱う。子音語幹動詞の場合はどの種類の子音語幹のものでも一様に [ite] が現れる (kakite「書いて」、tatite「立ちて」など) ので、歴史言語学的な解釈では、最初からこの [i] のある形を出発点としている。

⁶ 柴田 / 影山 / 田守を参照。ただし柴田 / 影山 / 田守では有聲音化の後に設置しているので、b m / __ d、m n / __ dとなっている。しかしその順序の根拠は述べられていない。ここでは破裂音の連続で不完全破裂の方が有聲音化より先に生じると思われたので順序を入れ替えた。Tsujimura では有聲音化より先に [b]、[m] の [n] への変化規則を設けている。

⁷ Tsujimura では s-子音語幹動詞は含まれていない。

⁸ 柴田 / 影山 / 田守では、この子音脱落についての記述はない。

⁹ 古語では「き・けり」。

3.1. イ音便・撥音便・促音便¹⁰

歴史言語学的な研究では、既述の生成音韻論の部分的な研究とは異なり、全子音語幹動詞を把握した解釈がなされている。それによると s-語幹¹¹、k-語幹と g-語幹動詞にはイ音便が、b-語幹、m-語幹、n-語幹動詞には撥音便が、t-語幹、r-語幹、h-¹²語幹動詞には促音便がそれぞれ現れる。そしてイ音便は子音が脱落したために生じたもの、一方撥音便と促音便は母音が脱落して生じたものと説明している。

3.2. 派生過程

以上のようにイ音便は子音の脱落、撥音便と促音便は母音の脱落が原因であるとする、それぞれの子音語幹動詞 + [ite] はどのような経過をたどっていくのであろうか。歴史言語学的な研究ではそれらの脱落以後の過程を確認してはいないので、前の生成音韻論的解釈での諸規則を適用させてみると <表 2> のような結果になった。

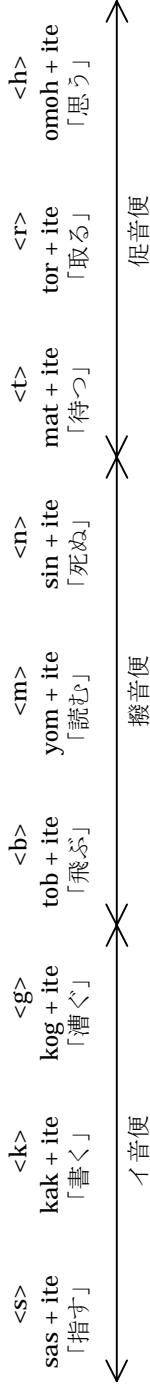
撥音便と促音便の母音の脱落が生じた後は、生成音韻論的解釈が出発点とした「過去」を表す接尾辞 / + ta/ の基底形が付加されたのと同様の状態になるので、同じ規則でもって同じ過程をたどる。しかし、ここで問題なのは、有声音化の際、子音の脱落した k-語幹、g-語幹動詞にはその規則が適用されないため、g-語幹動詞についてはしかるべき派生形が得られない。つまり、[kogite] は有声音化を引き起こす [g] がなくなっ

¹⁰ 古語においてはウ音便も動詞に現れ、現代の日本語では関西方言に残っている (kahite「買ひて」 > kaute > kôte)。田井(1978)によると、ウ音便は h-語幹、b-語幹、m-語幹動詞に現われ、それぞれの子音が脱落した後に残った母音 [i] が [u] に移ったと解釈している (utahite「歌ひて」 > utaite > utaute)。しかしこれらの語幹子音のうちの [h] を古語の発音の [ϕ] とするならば、全て唇音と捉えることができ、子音が脱落しても唇の形が残って [u] となったものと考えられる。すなわち [i] から [u] への推移ではなく、[i]、[u] それぞれへの別々の発達と思われる。

¹¹ 古語には saite「指いて」、ohasimaite「おはしまいて」などの例がある。

¹² 古語の発音では [ϕ] と推定されている。現代では [w]。

語幹
基底表示



子音の脱落

saite

kaite

koite

tobte

yomte

sinte

matte

torte

omohte

鼻音化: **b** → m / ___ + te

tomte

有声音化: **t** → d / (___ + te)
 + 子音
 + 有声
 - 流音

tomde

yomde

sinde

同化: **m** → n / ___ + de

同化: **r, h** → t / ___ + te

tonde

yonde

sinde

totte

omotte

音声表示

saite

kaite

*koite

tonde

yonde

sinde

matte

totte

omotte

<表2: +ite を基底形としたときの音便の派生過程>

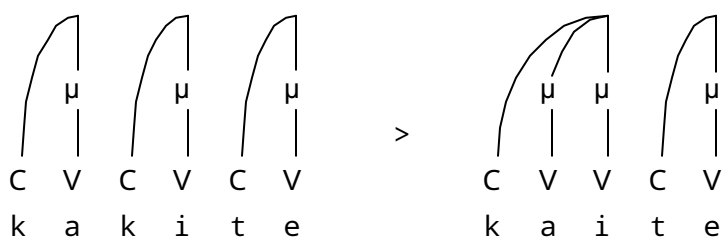
てしまうので、[*koite] となったまま [koide] にはならないのである。もし仮に、子音・母音の脱落より前に遠隔的な有声音化が生じたとしても¹³、[-ide] を持った例証 ([*kogide], [*tobide] など) は、調べた限りでは報告されていない。イ音便は子音の脱落、撥音便と促音便は母音の脱落によって生じた、と簡単に言ってしまってよいのだろうか。また、なぜ子音の脱落と母音の脱落に分かれるのだろうか。

4. 再解釈

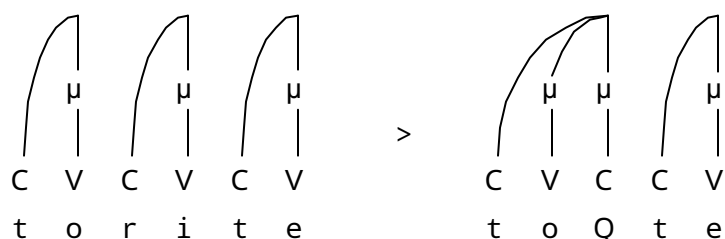
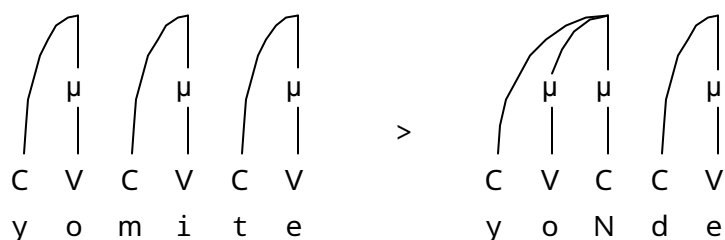
生成音韻論的研究では、ランダムに挙げた語群から接尾辞 [-ta] を取り出した。この点については異議の申し立てようがないが、歴史的に [-ite] を持つ語形が存在することは認めざるを得ない。もし仮に、古語における連用形 + [te] 形と現代語の過去形が異なった基底形を出発点としているとするなら、同じ音便現象には至らないはずである。ここで /-ite/ の方を基底に選び、上述の問題点を検討しつつ、再び音便の発生する過程を考え直してみたいと思う。

4.1. 音節の減少とモーラの保持

音便の派生過程の各規則について論じる前に、音便が生じる前と生じた後の音節構造を確認してみよう。



このように音便が生じる前は 3 音節あったが、生じた後では第 2 音節が母音のみとなり、前の音節に吸着してしまったので 2 音節へと減少している。しかし、窪園(1999)も指摘している通り、第 1 音節は二重母音として 2 モーラの重さを持っているので全体としては、音便発生後も 3 モーラがそのまま保たれている。これは他の撥音便・促音便においても同様である¹⁴：



撥音便・促音便においても 3 音節から 2 音節への減少が起きている。また、同時に第 1 音節は閉音節を形成することで 2 モーラを保っている。このように音便の発生前と結果の状態を比べると、音便とは何かが見えてくる。第 2 音節が単母音ないしは単子音に減少して第 1 音節に吸収されると同時に、二重母音の後半部、音節のコーダ子音は 1 モーラとしての重さを持ち続けるのである。

¹³ 村木(1992)では [i] の脱落についての説明の前にあらかじめ [t] と [d] を交替させてある。

¹⁴ /N/、/Q/は原音素。

4.2.派生過程

簡単に語幹の子音によって子音の脱落または母音の脱落を決めてしまうのはやめて、音便を子音語幹動詞語彙全体に及び、第2音節の軽化、つまり単音化として捉えてみる（<表3>を参照）。まず、歴史言語学的諸研究のように子音の脱落を起用するとg-語幹動詞の場合に問題が生じるので、有声音と接尾辞の[t]音を接触させるために基本的には母音の脱落が適用されなくてはならない。しかしその中でk-語幹、g-語幹動詞の[k]と[g]はその他の子音とは異なって、口蓋音であるので母音[i]と調音点が近い。そのため母音が脱落してもその母音[i]の口腔内の形を残しやすい。そして流音以外の有声音を語幹に持つ動詞には接尾辞[t]の有声音化が生じる。次に、破裂音を語幹に持つ動詞においては後続の[t]と破裂音の連続をなしてしまうために、語幹の破裂音の閉鎖の解放部が失われてしまう（不完全破裂）。そのためk-語幹、g-語幹動詞の[k]と[g]は[i]の口の形を残しているので不完全な破裂で極めて[i]の方の発音に近くなると思われる。b-語幹動詞の[b]は第2章で述べた通り解放部が失われることで[m]に変化し、t-語幹動詞の[t]は後続の[t]と二重子音と化する。日本語の[r]は、より厳密な発音は弾き音[r̥]であるので、解放部が失われれば、同調音点の解放のない破裂音[t]となるだろう。さらに語幹の[m]は後続の[d]に調音点が同化して[n]となる。そして、日本語では二重母音は二つの個々の母音の連続としてして認められ、また一音節内のコーダ子音は許容されないので一つの特異音素として認識される。このようにして最終的に、k-語幹、g-語幹動詞に生じた[i]に近い発音は一つのモーラを持つ母音「イ」として見なされる。また[n]が語幹に残ったものには撥音「ン」(/N/)が当てられ、それ以外の子音が語幹に残ったものには促音「ッ」(/Q/)が当てられるのである。

s-語幹動詞の[s]もまた[k]や[g]と同様に[i]の口の形を残しやすいと考えられる。そして不完全破裂の適用を免れて現在の形が得られる。また実際、この[i]は無声破裂音の間にあるので無声化されている。ただし、古語においてはイ音便の生じた形が例証されているので、その点については説明し難い。

語幹 基底表示	<s> sas + ite 「指す」	<k> kak + ite 「書く」	<g> kog + ite 「漕ぐ」	 tob + ite 「飛ぶ」	<m> yom + ite 「読む」	<n> sin + ite 「死ぬ」	<t> mat + ite 「待つ」	<r> tor + ite 「取る」	<h> omoh + ite 「思う」
------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	---------------------------

母 音 の 脱 落

saçite	kak'ite	kog'ite	tobte	yomte	sinte	matte	torte	omohite
--------	---------	---------	-------	-------	-------	-------	-------	---------

有声音化： t → d / +子音
+有声
-流音 — + e

kog'de	tobde	yomde	sinde
--------	-------	-------	-------

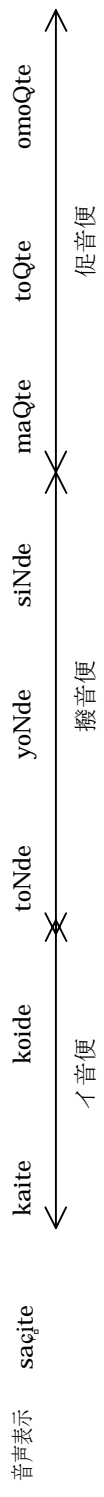
不 完 全 破 裂

kaite	koide	tomde	matte	totte
-------	-------	-------	-------	-------

同化： m → n / ___ + de

tonde	yonde
-------	-------

モ ー ラ 認 識



<表 3： + -ite を基底形としたときの音便の派生過程（再解釈）>

まとめ

以上のように生成音韻論と歴史的研究における音便の問題について論じ、再び解釈を試みたが、ここでは音韻規則の仕切り直しというよりはむしろ規則自体の解釈に重点を置いてみた。特に生成音韻論的な研究においては、その手順や方法のみが先走って「自然な規則」というものがあまり顧みられていないのではないかと思われる。「自然な規則」を得るには、変化の性質を考慮して適用範囲を考える必要もあるし、また調音音声学的に見て納得のゆく説明ができるかどうか「自然な規則」に対する重要な判断基準であろう。

参考文献

- 小松英雄 (1981) 『日本語の世界 7 日本語の音韻』 中央公論社
窪園晴夫 (1999) 『日本語の音声』 岩波書店
村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房
中条修 (1989) 『日本語の音韻とアクセント』 勁草書房
大西雅行 (1976) 『英語の音声法則』 学書房出版
斎藤純男 (1997) 『日本語音声学入門』 三省堂
柴谷方良 / 影山太郎 / 田守育啓 (1981) 『言語の構造：理論と分析 音声・音韻篇』 くろしお出版
田井信之 (1978) 『日本語の語源』 角川書店
Tsuji-mura, N. (1996) *An Introduction to Japanese Linguistics*.
Blackwell Publishers.
渡辺実 (1997) 『日本語史要説』 岩波書店